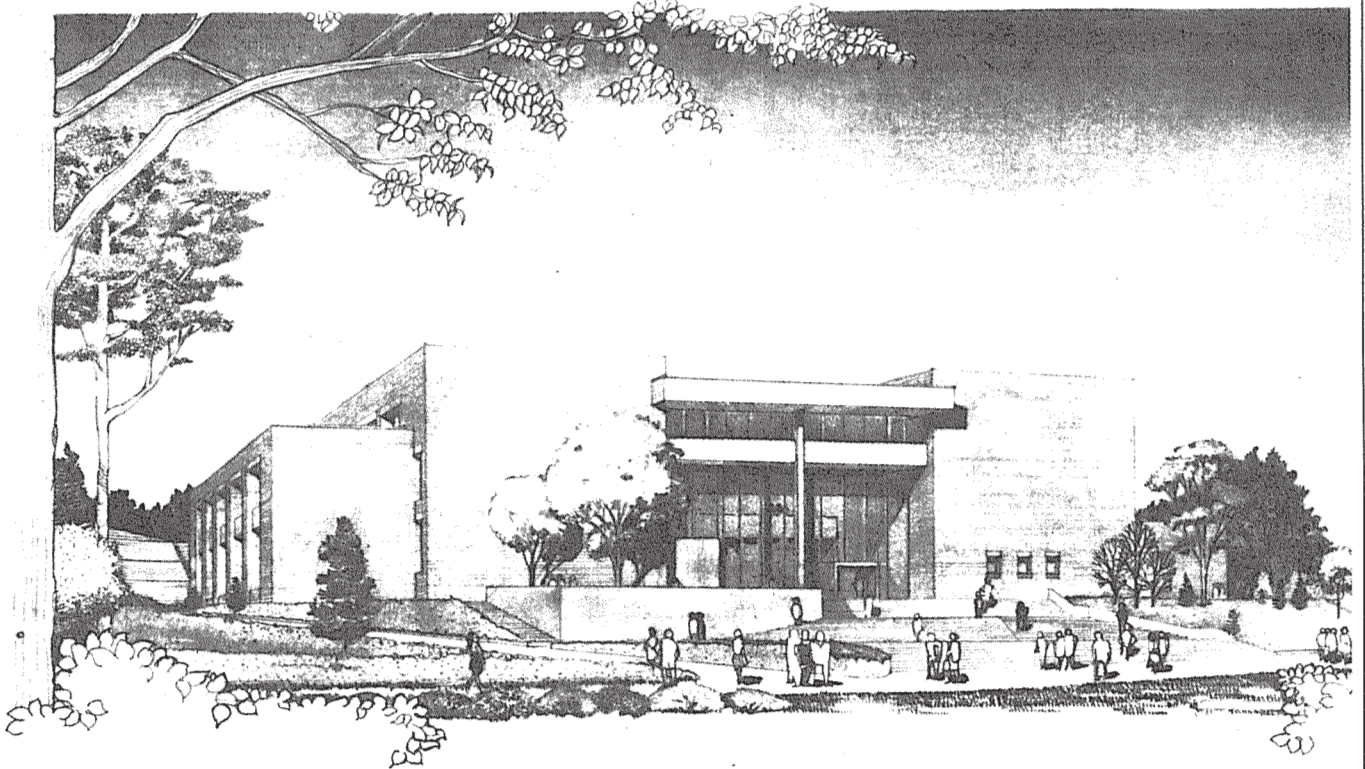


関西大学通信



総合図書館完成外観想像図

総合図書館、いよいよ建設へ

多年の懸案であった総合図書館がいよいよ建設される運びとなった。現図書館の限界が指摘されだしてから十余年、図書館総合計画委員会が検討を開始してから七年目にして、ようやく新構想が現実化することとなった。

長い間の審議を経て、第一グラウンドが建設用地として選ばれた。情報化社会の進展にともなう、大学における図書館が、教育・研究のための「情報センター」として果たすべき役割の重要性はますます高まりつつある。建設地は、来たるべき二十一世紀を見すえ、その大規模な施設と、それが本学全体の中において、まさに学術的中枢機関として機能し得ることを考慮して決定されたものである。

新設される総合図書館は、地上三階、地下二階の五層で、建築床面積（一階部分）は約四、八〇〇平方メートルとなる。第一グラウンドの約半分を占める。総面積は約一八、五〇〇平方メートル、地階部分に併設される情報処理センターを含めて約二〇、九〇〇平方メートルとなる。蔵書は約一五〇万冊を可能にし、地下の二層が書庫（一部に集密書庫）と研究者用キャビネットに当てられる。一階には、レファレンス部門と事務部門などのサービス・エリア、二階には、約十萬冊におよぶ開架閲覧室、三階には、一般閲覧室・特別閲覧室および貴重書庫などが配される。

この構成は、ワン・フロアーに諸機能の集中をはかり、研究者、学習者が、何よりも利用しやすいことを念頭に設計されたもので、「ノー・ステップ、フラット・フロアー」の

近代図書館の理想に出来る限り近づこうとしたものである。

総合図書館は、二十一世紀においても、充分にその図書館機能が果たせるよう構想されている。学内外の学術情報・文献が集中的に管理され、建物内部も将来、間取りの変更ができるよう弾力性をもたせた配慮がなされている。収蔵能力では、集密書庫化、マイクロ化など図書整理体系の改善をはかると、より多くの学術資料の蓄積が可能となる。さらには、コンピュータ化の推進により、利用の拡大・充実がはかられるであろう。併設の情報処理センターとの連携も予想されることである。利用の仕方によって、まさに半永久的な使用に耐えるようにという願いがこめられている。

この総合図書館が完成したあかつきには、大学図書館固有の建造物としては、おそらく日本のトップクラスの規模を有する雄姿が千里山キャンパスに現出することになる。

現実に、最新の施設・設備によるサービス活動が開始されるのは、昭和六十年四月の予定である。在学中に利用できるのは下位年次の諸君に限定されるが、上位年次の諸君には、卒業後、校友となって利用していただきたいと願っている。

総合図書館の建設は、これからの研究・教育のあり方に大きな影響をおよぼすことであろう。その建設の意義を十分にかみしめながら、ともあれ、工事が無事に進行することを祈りたい。

新しい図書館 建設に当たって



図書館長 名取栄史

昭和六十一年の春、第一グラウンドのおよそ南半分を占めて、図書館固有の建物としてはおそらく日本一の規模をもつ関西大学新図書館が開館することになる。

図書館とは大学の中心的機能を果たし心臓の働きをなす存在である。五十年の星霜を経た現図書館は空間的にも機能的にも狭隘を来たしている。最近の学術研究・教育の飛躍的な進歩は、学術情報・資料の激増と多様化に繋がり、従って図書館機能の拡充と近代化をもとめる。この要請に応えて、研究・学習機能兼備の総合図書館構想が具体化した。多年に亘り全学の微知を集めて精力的に検討準備を重ねてきた結果である。

図書収集・整理・提供という最も基本的なサービスの充実は勿論だが、適切な文献情報サービス

ス、資料提供の為に国内外の他研究機関・大学の図書館との交流と相互協力が必要となり、その為の最も効果的な方法が考えられねばならない。更に十年先の図書館像となると殆ど見当もつかない。

が、計画図に示された建物内部のスペースとフレキシビリティは二十一世紀へ向けて想定されるあらゆる課題に如何ようにも対応し得べく配慮されたものである。

まず書物があり、それに魅かれて人々がその周囲に集まったのが大学の歴史の原点である。千里山キャンパスの研究教育エリアの中心に、広大な緑に包まれ、学生諸君の憩い戯れる、親しみに溢れたオープンスペースを背景にした、壮麗な新図書館が大学に新しい時代と風景美を創造する日を期待しよう。(文学部教授)

新図書館は研究・学習・保存の機能を有し、文献情報サービスを最大多数の最大利用をはかり、学問・教育の進歩に忠じて学際的・学際的の発展に資するよう、図書および資料の分散をできるかぎり避けて、集中的に運営する必要があるであろう。

建物用地についても種々論議がかわされたが、新図書館の規模が広大なものであり、学内においてこれに代わりうる場所がないということ、また利用度の面から考え

理事会の 取り組み



副理事長 稲野治兵衛

理事会が法人の設置する関西大学を運営する基本は、研究教育に関する教職員の大学の自治にかなう所作に全幅の信頼を置き、教育・研究の充実発展に資する財政措置をはかることにある。総合図書館の建設についても、この基本に則って理事会は以下のように所作している。

昭和五十二年六月、総合図書館の建設計画についての図書館総合計画委員会からの答申が学長から提議されるや、理事会は直ちにその趣意を了とし、その具体化に向けての策定を学園建設委員会に諮問した。その後数回にわたって、学園建設委員会から要望・中間答申を受け、教務側との意思の疎通をはかりながら、その建設の実現に向けて鋭意努力を重ねてきた。

このような経過を経て、昭和五

でも、第一グラウンド南側区域に決めざるをえなかった。

図書館設計で著名な鬼頭梓氏に委託した設計も、最近ようやく基本設計が固まり、引き続き実施設計、建設地の地質調査を行ったのち、本年秋に工事が着工される運びとなっている。

最後に、新図書館が皆さんに祝福される総合図書館として、その偉容をあらわす日の早からんことを祈って筆を擱きたい。(商学部教授)

十六年七月、教学のコンセンサスが得られた建設計画案を承認するとともに、同年十一月には、図書館建築設計家の鬼頭梓氏に設計委託を行った。

なお、この総合図書館の基本設計がまとめられつつあった最近になって、本年四月に情報処理センターが大学の組織として設置されることになった。理事会はこの状況をふまえて、図書館の長期的な視点と建築経費の経済性、建築構造の有利性などを勘案し、将来計画としてあった情報処理センター施設の建設を繰り上げて、総合図書館の地下部分に併せて建設することが得策であると判断した。よって、この旨学園建設委員会に諮問し、しかるべしとの答申を得たので、総合図書館の建築と情報処理センターの建築を同時着工す

ることになったものである。

一方、総工費は、現段階では約四十五億円(情報処理センターを含めると約五十億円)を予定している。この額は、今後の設計の進展に応じて多少の変更もあり得る。この資金の確保については、昭和五十三年度から実施している総合図書館建設資金に充当するための積立金を柱とする自己資金と、日本私学振興財団からの借入金等による資金計画をたてている。

総合図書館建設にかかるとしての取り組みは、前述のとおりであるが、この間評議員会およびその関係委員会においても、有益かつ貴重な要望、意見が披露されてきた。理事会は、こうした評議員会の意向を建設計画に反映するため懇談会を開催したが、今後とも評議員会と充分な連絡を取っていく考えである。

このようにして、総合図書館の建設計画は、いま具体的な設計段階に入っている。この大事業が広く全園大に祝福されて、その偉容が千里山キャンパスに現出することを待望するとともに、日本一を誇るこの施設の完成によって、

本学の学術研究・教育の質的水準が一段と高揚することを願うものである。ちなみに建設場所を第一グラウンドに計画したことは、教育の一方の柱である体育施設に影響があり、また、学生の健康の場所としての利用も削減されることとは、立地の関係、余裕土地の関係上やむを得ないものであるといえ、忍び難いところである。これらについては、短期的、長期的な展望をもって教学の考えを開きつつ対応する必要がある。

総合図書館建設 設に至るまで



教務部長 来住哲一

本学の図書館は、昭和三十年以降、大学の規模が拡大するに伴って、数度にわたり、書庫の増築、閲覧室の拡充などを行い、その間

昭和三十三年には専門図書館が建設された。このような断片的な拡張でもちこたえてきたこれらの施設も、昭和五十年ごろには、図書

学術研究と教育の進歩は図書館の高度化・総合化を強く求めており、また学術情報激増と多様化は、図書館機能の拡充と業務運営の近代化を促している。したがっ

るであろう。

こうして完成した運動場は、広さ約一万坪、北側には自然の地形を利用して一万人収容のスタンドを設け、東西に百メートルの直線コースを含む周囲四百メートルのトラックを備え、野球・蹴球・ラグビーの施設を併せもった一大総合運動場で、まことに「東洋一」の名にそむかぬものだった。

関大の新たな発展

園田香融

新図書館の建設は、関西大学の学運進展の必然的帰結であり、また将来の発展のための不可欠の前提となるものである。しかし一方では、その建設のために関大名物の第一グラウンドのほぼ半分が失われることは、限りなく淋しい。

数々の栄光と汗と涙をひめた第一グラウンドのためのレクイエムを奏でる思いをこめて、その五十七年に及ぶ輝かしい歴史を顧みることにしよう。

第一グラウンドが完成したのは大正十五年八月のことである。同年十二月には改元されて昭和となる。だから、第一グラウンドの歴史は、昭和の年号と同じくらいに長い。

関西大学が「自然の秀麗」を誇る千里山に進出し、同時に大学令による大学への昇格を果たしたのは大正十一年六月のことであった。大正七年に新しい大学令が公布されたが、当時、大阪市内の福島にあった本学は、敷地わずかに一五〇〇坪、という昇格は認められなかった。当時の理事や校友は、大阪商工会議所会頭の山岡順太郎に働きかけ、必要な資金と用地の確保に協力を求めた。山岡は当時、大阪商船・日本電力(関西電力の前身・大阪鉄工所)日立造船(の前身)などの社長を兼ねる大阪財界の巨頭だったが、みずから学歴に乏しく、教育の必要性を痛感していた。本学のもとにここ

汗と栄光の第一グラウンド



ろよく応じ、やがて本学総理事に就任した理由である。山岡を本学経営の首脳に迎え入れることにより、昇格の機運ははじめて本格化した。

このころ千里山線が開通し、千里山の景勝は大阪人の関心を集めていた。山岡はこの秀麗の新天地に着目し、大正九年、現在の第一学舎付近の用地一万五千坪を購入し、ここに理想的な学園の建設を計画した。大正十一年四月、まず予科校舎が現在の大学院学舎の敷地に完成し、五月一日、晴れの始業式を挙行政した。そして同年六月

かかる。

学問と実際との調和を力説した彼は、学生スポーツの正しい理解者でもあった。当時、予科校舎の東側は大きな窪地になっていて、山岡はこの付近を買収し、ここに「東洋一」の大運動場の開設を計画した。大正十三年秋着工、八万五千坪の経費と一年半の歳月を費やして完成した運動場が、今の第一グラウンドである。資金は識者の寄付を仰いだり、山岡は率先して二万五千円という巨額の私財を投げ出した。もってこの運動場に寄せた彼の熱意の程が偲ばれ

るであろう。

大運動場の完成は、昭和初期のスポーツ関大の黄金時代を招いた。三段跳の大島・戸上、槍投の長尾、中・短距離の藤枝・谷口など、数々のオリンピック選手が生まみ出された。怪腕西村投手を擁する野球部が、関西六大学戦に圧勝したばかりでなく、毎年のように全国制覇をなしたげたのも同じころである。華やかな対校試合には応援団がくり出し、紫紺の大旗がなびき、スタンドを埋め尽くした観衆を熱狂させたものである。

輝かしい栄冠のかけには、涙ぐましい不屈の猛練習があった。汗と泥にまみれて猛練習をつづける運動部員たちに、教科書片手の教授や学生が無言の声援を送りつつ親和坂を往き来する姿は、今も昔にも変わらぬ関大ならではのほほえましい光景である。

昭和三十年ごろから、本学は飛躍的な発展期に入った。学部の増設、学生数の増加に伴って運動場も拡充された。まず図書館東側に第二グラウンドが開設され、ついで第三、さらに最近には第四グラウンドも完成した。第一グラウンドの果たしてきた機能は、各グラウンドに分割継承されたが、第一グラウンドとその周辺は、春は桜が咲き匂い、秋は銀杏の黄葉が散り敷く、美しい大学の「中心ひろ

情報処理センターも併せて建設

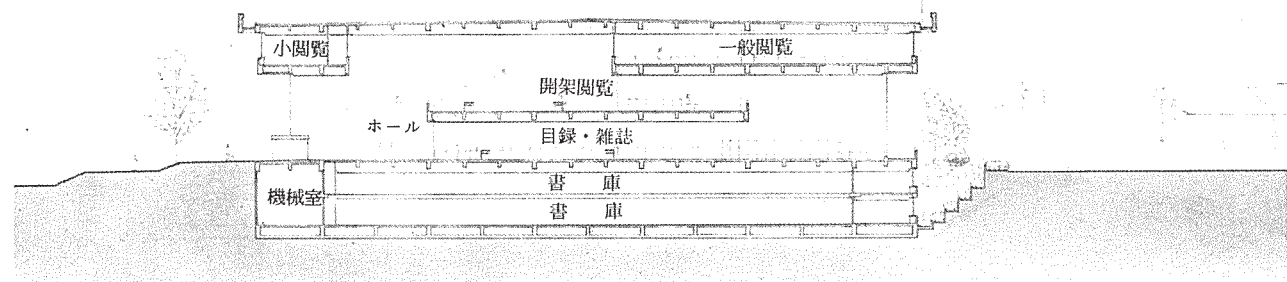
近年、国公私立を問わず、わが国の各大学においては、研究・教育・事務の各分野において、電子計算機の総合的な利用が推進されており、そのための施設、設備、組織などの整備も精力的に進められている。

本学では、昭和四十六年三月に工業技術研究所内に全学組織として電子計算機室が開設され、電算機本体としてFACOM2301・二五システムが導入され、その後も、五十二年十月にFACOM2301・三八、翌年十月には二二〇一四八・一五五年九月にはFACOM M-11六〇Fにレベラアップされた。この間の利用件数は、五十三年度十万件、五十四年度十四万件、五十五年十六万件で、五十七年度には年間十八万件に達するものと推定される。

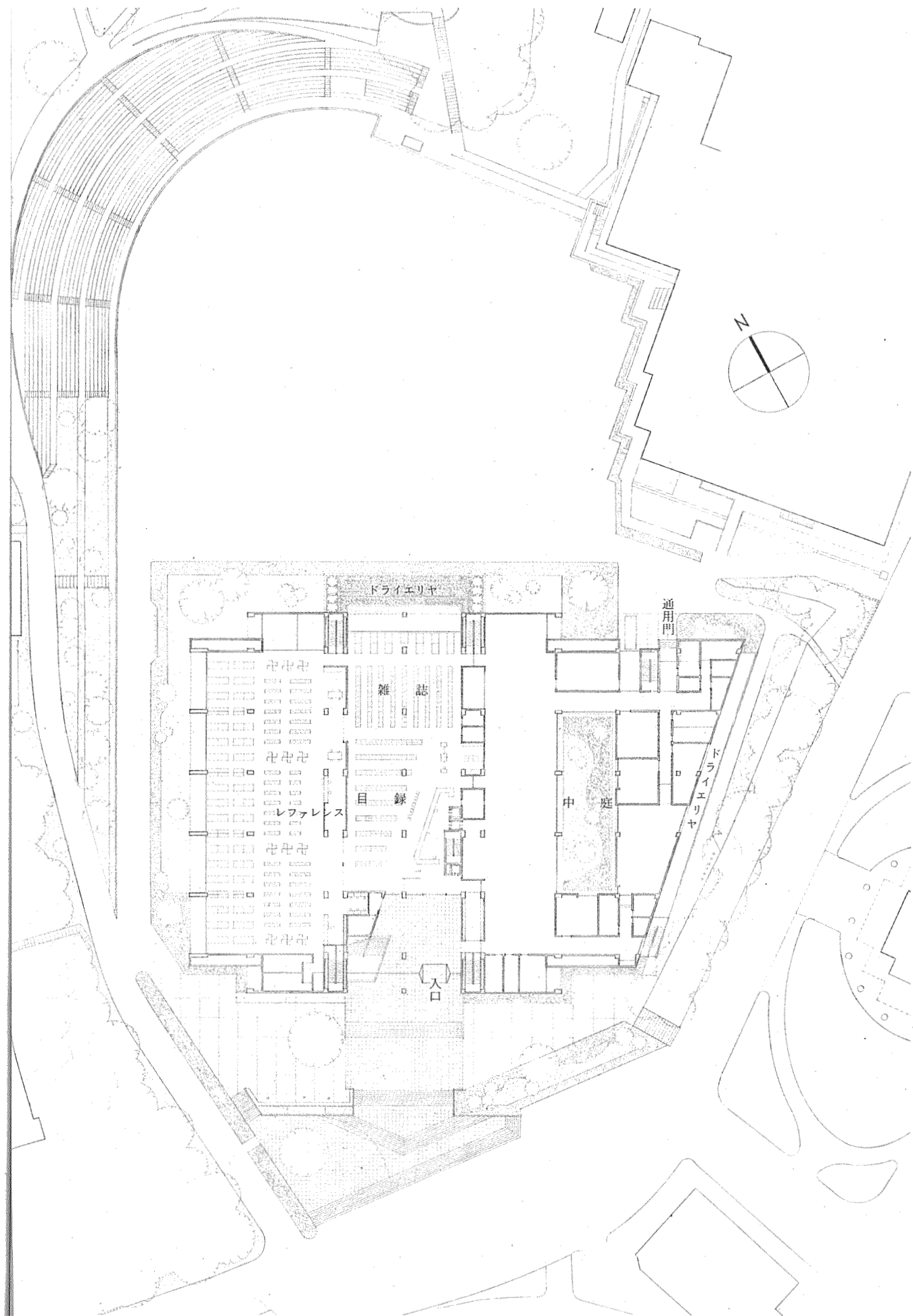
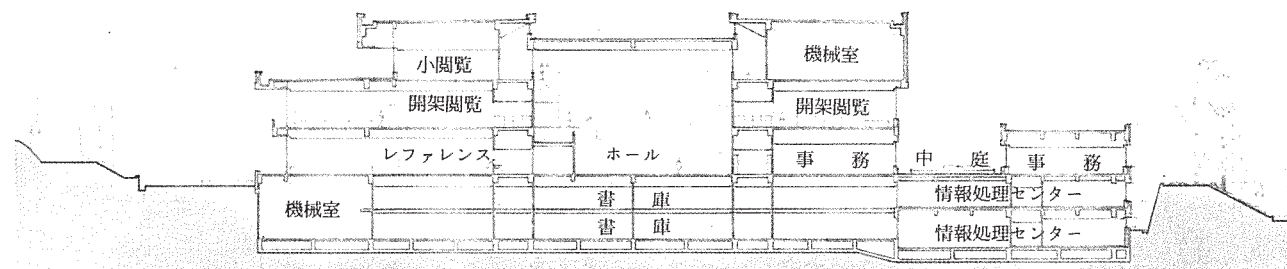
この建物の内容は、管理エリア、学部学生のための情報処理教育として、工学部が四十四年度に情報処理科目を設置し、四十九年度に整備拡充が行われ、社会学部でも五十四年度から電子計算機実

総合図書館建設図

〔南北断面〕



〔東西断面〕



今後の大学図書館

岩猿 敏生

現在本学の蔵書数は百万冊をこえる。これは関西の私大としては最大の蔵書量であり、全国的に見ても、私大で本学の蔵書量を上回るのは、早大、慶大、日大だけである。もちろん、図書館の評価は蔵書量のみで行うことはできないが、豊富な蔵書を持つことは、図書館の重要な要件であり、また、そのような図書館を持つことは、大学における教育・研究上の基礎的な条件である。

図書館の蔵書は年々成長する。図書館の種類によっては、利用の少なくなった資料を除くことにより、蔵書量を一定に保つものもある。大学図書館も学生の学習面への奉仕だけにその機能を限定することは可能であり、開架閲覧室では一定量に制限するのが普通である。しかし、研究面への奉仕を考えると、蔵書量は多々ますます弁すである。世界の一流大学図書館の蔵書の成長は急激である。その時生ずる深刻な問題は、容れ物である建物をどうするかである。本学でも、蔵書量は図書館の収容可能量をこえてしまっている。

解決の方向に二つある。一つは、将来の成長を見込んだ十分に

大きな単一の建物を建てること。いま一つは、機能別や主題別ごとに分散化していくことである。全体の量が大きくなりすぎるとき、分散化が能率的であるが、通常では、単一の建物に集中化していく方が、管理面、利用面から能率的である。しかし、集中化の効をあげるには、その位置が全学的にもっとも便利な場所でない限りならぬ。本学は歴史的に集中化で進んできた。これはきわめて賢明な選択であった。

戦後日本の大学図書館は、学習機能の充実という面では、大きく発展してきた。その面では、欧米諸国と比較しても、必ずしも遜色はない。したがって、今後わが国の大学図書館が充実をせまられていくのは、研究面への奉仕機能である。それには、学術的に奥行きを持った資料収集、学術雑誌の利用法の改善、参考・書誌サービスの充実がとくに望まれる。本学における教学の基本条件としての図書館を、今後どのように充実するか、とくにさし迫った施設面の充実、全学の認知が結集されることを望むものである。

(図書館建設実行委員会委員・文学部教授)

木辛氏に聴く

構想について

きぎて・山野博史(法学部助教)

(昭和57年3月13日、関大会館来賓室)



知おきください。

他の紙面の記事と話が重複しないように心がけるつもりですが、やはり最近に、新しい図書館は学内のどの辺に建てられるのか、という大方の最大の関心事があります。

第一グラウンドの南寄り半分を使用することになるのですが、面積のとり方は、適正な規模なんでしょうか。特に、一階のレファレンス・ルーム。大学では学術雑誌はここに一緒に置かれる

大学の真に中枢的な機能に 大切なのは資料と人間

新しい総合図書館の設計計画がようやく実行に移されることとなり、基本設計の完成も大詰に近づいていると聞いております。しかし、さ、どのような図書館ができるのか、という肝心のこととなり、学生諸君はもちろん、教職員にもいま一つ周知されていると思います。

「なるべく、この「特集号」の中心に、整理関係の事務室も当然一緒に置く。それにエントランス・ホールをつくらなければならない。今度の面積は、どうしても今度の一階の面積から、どうしてしまおうか。一階の面積を分割して、目録と雑誌、それそれにワン・フロアーとする、利用者

は恵まれているほうなんじゃないですか。鬼頭 そうですね、理想的です。大学のまん真ん中にあるし、学生がよく通る場所だし、学生の図書館を使う頻度はぐんと高まるんじゃないですか。たとえ、通りすがりにでも、図書館に入ることを、何かが始まる。しかしねえ、いまどき部会でこれだけのスペースが使える……という、

これ、使っちゃったわけですけど、すでにあるキャンパスの中で、図書館のためにこれだけの場所が提供されることになるなんて、奇蹟ですよ。そのありがた味をわれわれも、感謝したほうがいいかも知れません。これが完成すると、日本の大学図書館として、どういう格付けになりますか。鬼頭 大ききでは、最大ではないけれど、トップクラスの規模になるでしょうね。

フラットなものでこれだけの図書館は類を見ないのでは……。鬼頭 以前、私も設計した東北大学の図書館くらいではないでしょうか。でもまあ、国立大学は土地があまりからねえ。



鬼頭 梓氏

大正15年、東京都生まれ。昭和25年東京大学第一工学部建築学科卒業。同年、恩師前川国男氏の建築設計事務所に入り、昭和39年独立、鬼頭梓建築設計事務所を開設、今日に至る。現在、日本建築家協会ならびに日本建築学会会員。主な作品に、東京経済大学図書

鬼頭 梓氏 甲南大学図書館(昭和53年度神戸市建築文化賞受賞)、山口県立美術館(昭和54)、法政大学図書館(昭和55)、神戸市立中央図書館(昭和56)、立教大学図書館新座保存庫(昭和57)などがあり、建築業協会賞にも二度輝いておられる。

鬼頭 そうですね、もうひとりの利用者、学生諸君の問題に移す。四年間一度も図書館を訪れることなく卒業していく学生もあろうと思う。これは本人の不勉強だけが原因でなく、図書館は手狭なところという思い込みが、あつて足が遠のいていくように思います。積極的に利用している学生でも、図書館は自習室の延長である場合が多いのではないかと。

鬼頭 設計者

新庁図書館の建築

本が学生に語りかける 視覚に訴え、資料で訴える

ら、エネルギーの消費量は少なくて済むことになり。また、貴重書と進貴重書の書庫は、皆さんご心配になるので、二階にあげようと思っています。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。鬼頭 そうですね、先生が利用する人のニーズも、先生と学生ではちがいますから、厄介です。

想像力とのたたかい

うるおいのある読書空間をもとめて

く、レファレンス・ルームも活用してくだり、そこで勉強していただけるなら、学生諸君にはいい刺激になると思いますよ。確かに、学生と一緒に楽しめたいけれど、なるべくなら混在していただけたほうが、コミュニケーション・ギャップが生じなくてよいのではないかと。

☆……………☆

愛着の持てる図書館に

——新しい図書館の書庫は一五〇万冊も入るようなものになるそうだが、そんなのができて、本は無限にふえつづける。いくら大きなものを建ててもいずれ必ずパンクする。そのときのことをどう考えたらよいのか。

☆……………☆

鬼頭 一般的に申しまして、予測不可能でして、一〇年先でさえ何もわからないといったほうが正しい。

「どうせわからないのなら、いま本に当にいいものをつくれればいい」というのが一つの考え方です。だけど、世界の図書館の活動には、ひとつの大きな流れというものがあって、それはそう急激に変わると思えない。それに、日本がその先端を切っているわけでもない。先端切っていたら、もっと混迷するでしょうけど、後から追っかけているんですよ。その見当はつくはずですよ。だから、いま予想しうることだけはじゅうぶん予想しておかないといけないけど、そこまで考えたら、今度は建物に合わせたというか、建物を使いこなして

ていただくよりしかたがない。消極的に見えるけど、これが一番大事なことではないか。相当不便な建物でも、「これはこわすにはしのびない」と思ってください。私も、苦勞のしがいがあるというものです。皆さんに愛着を持っていただけたら、私のほうの負けだ……。

それから、書庫に関していえば、これも図書館建築の常識として、増築できるようにしておくのが原則になっています。そうしておけば、皆さん、何となく安心される。

しかし、実際には増築可能でも、それなりの限度がある。それを克服するもつとも有力な方法は、図書館同士の相互協力、相互貸借です。日本でも何十年来いわれ続けているが、遅々として進まない。これだけ資料がふえ、さらに急速にふえつづけていくわけですから、将来どこまでふえるのか知りませんが、何でも一つの大学でまかないきれぬものではない。この問題に、本気で取り組まざるをえない日が遠から

ずやってくるでしょう。

また、閲覧室については、これも資料の形態とか数量とかが、いつまでも現在計画している通りであるはずはなく、どんどん変わっていくと思えます。目録なども、いずれはコンピュータで検索するか、マイクロフィッシュを使ってやるか、もう一〇〇万冊をこえてくると、カードは必ずしも適当な方法でなくなってくるかも知れません。ですから、そういう変化についていけるだけのことを建物として用意しておこう。

話が前後しますが、読書はもとも非常に個人的・内面的な行為ですから、できれば本はひとり静かに読みたいものです。しかし、すでにお話したような理由から、だだっ広く、個性のない大空間が、機能的には要求されてくる。根本は「読書」が本来欲する空間とは、根本的に矛盾する。この矛盾をどこまで解決するか、あるいはそれが無理だとすれば、どこにその妥協点を見出すか、設計するほうにとつ

建設工事の概要と

学生諸君へのお願い

新しい総合図書館建設の建設工事は、学内外の関係者の理解と協力がなければ、なしえない大事業です。ここに、具体的な工事の概要を示して、とりわけ学生諸君の協力を求めたいと思います。

一、地質調査(ボーリング)

本工事を始めるに先立って、本年七月初旬から約一カ月間の予定で、新図書館建設敷地内(第一グラウンドの中央部から南側部分)の地質調査を行います。この調査は、長い将来にわたって建築物の安全性を確保しうる基礎および地下構造の万全な設計をはかるため

二、工事期間

工事は、いくつかの段階を経ながら、今年十一月月上旬より、昭和五十九年十月下旬まで、約二カ年間にわたって行われます。

三、建設場所

図書館建設用地となる第一グラウンドは、工事が始まるまでは使用できません。しかし、地質調査期間中には、その調査地点は使用できません。なお、その作業現場周辺も危険ですから、近寄らないようして下さい。

工事が始まると、第一グラウンドは建設用地以外の場所も、資材置場等になるため、全面的に使用できません。

四、その他の注意事項

工事期間中は、工事現場の周囲に工事用隔壁が設置されますが、資材運搬用トラック、コンクリート・ミキサーなどが通るなど、工事現場付近は常に危険がともないです。くれぐれも注意して下さい。工事によっては、とくに地質調査

や基礎工事(杭打ち)の際には騒音が出ることも予想されます。

以上のように、この工事にとっても、長期間にわたり、数多くの迷惑と不便をお掛けすることになると思っています。大学としても、学内における教育・研究等におよぼす影響を最小限にするため、可能な限りの配慮と努力を行うつもりです。学生諸君ならびに教職員各位も、紙面の他のページに述べられている総合図書館建設の意義を十二分に理解され、協力していただくよう、重ねてここにお願いする次第です。

なお、工事の進捗状況や今後に判明してくるより具体的な注意事項等については、必要に応じて、その都度、「関西大学通信」等でお知らせする予定です。

て、これは大問題なんです。少しでも多くの人に利用してもらいたい。けれども、中に入った人がひとり心静かに思索できるような空間も確保しておきたい。そんなふうなまじりかたは、設計していただくうえで、一番興味深い問題なんです。

身体障害者をはじめとする公共施設で物理的・精神的に不利益をこうむりがちな人びとに対して、きめの細かい配慮が必要なもの、このことと密接な関係があるかも知れません。ですから、この点については、通常考慮すべき問題は全部考えに入れるつもりです。

あれこれ申しましたが、自分がつくったものを五〇年から一〇〇年くらいは使ってもらいたいからこそ、なんでも……。「二〇年たったらこわして」とおっしゃるなら、それはよく考えこまなくていいわけですからね。

お話をうかがっていると、すばらしい図書館ができそうな予感がするんですが、それが、何十年かのちに、果たして、「大学の中枢の機能」になっていくかどうか。将来、鬼頭先生が採点に見えられたときにそうなっているだろうか。試されるのは、われわれのほうということになりそうです。ね。確かな長期的見通しに立って、全員の創意と知恵を結集しないといけませんね。

鬼頭 結局、建築の設計は、想像力とのたたかいでして、図面を描いているときは、その中で、できあがった空間を想像していることになるんですよ。その想像していることと図面とがピタッと合えば達人なんです。私などがまだ未熟ですから、合わないところがあるわけで、それを合わせようと苦心して、模型つくって眺めてみたりするんです。だから、建物ができなくていい段階はともかく……。「こんなはずではなかったのだ」というような、とんでもない見込みがいたりして、そんなことのないように、こまめに現場に通い、なるべく早くまちがいを発見して、手の打てるうちに手を打って、設計変更でも何でも可能な限りの努力を積み重ねていきたいと思います。

とね。とにかく、いい仕事にしたいと思っております。

——設計者ご自身の産みの苦しみに対して、どこまで気持ちが行き届きますやら、はなはだ心もなない限りですが、工事の無事と成功を祈っております。

今後共、ご苦勞をおかけすること存じますが、よろしくお願いいたします。

本日は、お忙しいところ、貴重なお時間を拝借いたしました。どうもありがとうございました。



編集後記

この「特集号」は、これから始まる画期的な総合図書館建設の概要と、その計画についての経緯、設計者の建築構想(インタビュー)などを明らかにするとともに、建設に臨んで学内外の関係者の理解と協力をあおぐために編集したものである。

総合図書館の建設は、つくづく大事業であると思う。昭和五十年以来七年間、そのために積み重ねられてきた会議のおびただしい回数からでも、そのことが推し量れる。

「特集号」の編集にあたっては、十指にあまり関係部局のお世話になった。ご協力下さった方々に厚くお礼を申しあげたい。執筆の方々には十分の紙面を提供できなかったことが心残りである。

総合図書館の開館までには、ほぼ三年の歳月を要するといえる。今後、この新図書館が本学の学術研究に、より豊饒な実りをもたらす、新しい文化の創造に繋がることを祈りたい。

(小川雅也)